

月日は百代の過客にして、行き交ふ年も
又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とら
えて老をむかふるものは、日々旅にして旅
を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。
予もいづれの年よりか、片雲の風にさそは
れて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ
去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をは
らひて、やや年も暮、春立る霞の空に、



白川の関こえんと、そぞろ神の物につきて心
をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取
もの手につかず、もも引の破をつぶり、笠の
緒付かえて、三里に灸するより、松島の月
先心にかかりて、住る方は人に譲り、杉風
が別野に移るに、面八句を庵の柱に懸置
草の戸も住み替る世や、雛の家

(松尾芭蕉、奥の細道)

